

新生の海

すみくらまりこ

新生の海（オペラ）

登場人物

不比（第一幕 7-19歳）

当磨（第二幕 不比の新しい名：20-58歳）

千麻（第一幕 5-17歳）

志麻（第二幕 千麻の新しい名：18-56歳）

不比の父（第一幕30歳）

不比の母（第一幕24歳）

領主（第一幕40歳） 村の長（第二幕75歳）

村人たち（第二幕80歳）

当磨と志麻の息子たち（第二幕0-20歳）

第一幕 虹色に光る貝

第一幕 第一場 幼なじみ

(ト書き) 今から千三百年も前のこと、土左の郷は質素であつたが、幸せな人々が暮らしていた。貢げるものと言えば、父がとる鮑や魚、わずかな作物を差し出すと残りはなにも残らず、小魚や海藻を煮て腹を満たすのだった。でもすくすく育つ子どもがあることで、頬がゆるんでくる。母もまだ見目も美しい。その子どもは不比といい、いつも波打ち際で遊んでいた。当時五歳の幼なじみの千麻と一緒にすべすべの石を集めたり小魚を追いかけたり、貝殻をさがしたり、夕日が落ちるまで遊んでいた。父母は、網をつくろったり、舟をだしたり、畑をしたりで働きづめだった。そんなある日

不比「千麻よ、こっちかざで、ええもんがあるぞ」

千麻「あそこになんかあつつろう」

不比「ほんなら、わがとってくる」

千麻「あら、これえいにゃあ」

不比「ほら色が変わるぞ」

千麻「くれっちゃ,くれっちゃ」

不比「おお、ほれ」（拾った貝を渡す）

千麻「げに、まっこと、ほんまかに」

（いいにくそうに、まじめな顔で）

不比「あのう」

千麻「なんや」

不比「それ一生持っとけ」

千麻「そうする」

不比「これはな、神さんがくれたんやぞ」

千麻「神さんがくれたんやな」

千麻「人に見せたら消えてしまうかや」

不比「ずっと隠して持っておけ」

不比「宝物ひろった」

千麻「宝物や」

（母の大声で帰る。うちで昼めしの時間

不比、母、父がいる」）

母「不比よ、ご飯作っちゅう。はよ帰り」(大声)

不比「もうひようなってきた。千麻よ、ほれ帰るぞ」

父「今日は大ぶりの鮑がとれたき」

母「まあ、立派じゃのう、おまんすごいねえ」 父「どうじゃろ、これをお館さまにあげるがや」 母「なぜに、不比がよろこぶやき」

父「なんか、ごほうびがもらえるぜよ」

母「ほれやったら、はよいかんと」

父「ほな、いこかのう」

(夫婦揃って鮑を笹の葉にのせて献上にいったところ、よほど嬉しかったのかお館様に お目通りが叶いました。母者は貧相な布着が恥ずかく顔をあげることはできません。お館様は優しく面をあげいと云いました。濡れるような黒い瞳を好もしく思いました。)

父「お館さま、まっことごっついあわびが採れたきに参じました」

領主「そうかそうか。ほうびににごり酒をつかわす」

父母「ははあっ ありがとうございます(嬉しそうに手にとる)」

領主「それは手前の女房か」

父「ははっ～(平伏する)」

領主「その女、近う寄れ、顔が見えぬ」

（二人は喜んで帰る。妻を三年前に亡くした領主は 都への帰還を望んでいたが、それも叶わず 悶々とした日々を過ごしていたのだった。しかしこの日不比の母に一目ぼれをして 一気に意気が高揚してきた。そんなことがあり、正直な不比の家族は音を立てて崩れていく）

独唱（領主）

黒い瞳の女

波頭が立つと 心がさわぐ

遠い都は 私をわすれて

華やいでいるだろう

何もない 海しかない

こんな暮らしは 砂を嚙んでいるよう

風に晒されているよう

帰りたい 都よ

なぜに 私を忘れている

なぜに 便りをよこさない

もう堪えられぬ

生きるしかばねだ

そんな時 この女がきた

瞳が 黒く 潤んでいた

ならば この地で 生きようぞ

守護神と なってやろうぞ

都を忘れて 生きようぞ

この女と 一緒ならば

父「ああ、どいたらよいろ。おんしがお召しや。お館様のお召しや。嫌とは言えんきに。 ああ、どいたらよいろ」

母「すぐに帰れるきに、辛抱しちよって。行きとうないけど、ここは黙って行かしとおせ。」

父「ああ、どうしよ、どうしよ。あの鮑が取れたきに、こうなってしもうた」

母「わがどんな気がしちよるか、誰にも分からんやろう。」

不比「絶対行ったらあかん。おらを捨てるっちゅうか」

合唱（父・母・不比）

悲しい別れ

別れとは

こんな急に くるものか

幸せな 家族をはがす 運命に

誰も声を あげられないで

泣きくれる

裏で泣く

影で泣く

一人で泣いて 身をなげく

誰もが 逆らえない

答えのだせない命令に

母であること

子であることに

変わりなく

そばにいられず

身を呪うては なみだする

（不比の母が館へ上って、それはそれで大事にしてもらいました。
愛妾としてかわいがられたのです。不自由なくとも、罪深い気持ちで残した夫や子どものことを思わない日はありませんでした。）

独唱（母）

子を恋う歌

なぜにわたしは
我が子を置いて
ここにいる
今も あの子は
帰らぬわたしを
待っているのに

ご飯は食べたか
からだ洗うたか
どこも痛くないか
けさは何を着る
ぐっすり寝たか
欲しい物あるか

ああ気にかかる

待ってておくれ

わたしの帰りを

いつか帰れる その時を

待ってておくれ

（不比の母はお館へ召されて行きました。不比にはすぐに帰ると云ったので信じて待っていましたが、いつまでも戻らないのです。淋しい年月でした。そのうち村の女が家に入ってきました。ご飯炊きということでした。時はあっという間に流れ、不比は背丈が伸び、大人っぽくなってきました父は何を考えているのか、何もかも解せない不比です。千麻はそんな不比が可哀想に思われて、とても好きになりました。成長につれて、不比も悲しみが紛れて来ました。でも影ある男 になりました。そうです、人生の不条理を知ってしまったのです。）

独唱（千麻）

母思い

かれの 目が泣いている

わたしには 分からない悲しみに

いつも無口で 耐えている

わたしにも 言えないで

お母あ

お母あ

戻らない お母あ、と

心を震わせ

叫んでいる

わたしには 聞こえている

かれの 母思い

わたしには 術もない

ただ いつか来る

わたしたちの 時を待つ

第一幕

第二場 千麻は渡さんぞ！

（それから十五年が経ちました。不比も千麻も毎日の漁りに、機織りに貧しいながらも、平和に暮らしていました。獲れた魚の話や、織りの図柄のこと未来のことなど、夕日が落ちるまで舟べりで話すのが楽しみでした。そんなある日―）

領主「もうわしも四十。都が恋しいぞ」

不比の母「（無言）」

領主「どうじゃ、この村一番に働く千麻とやらを知ってるか」

不比の母「まだ子どもだったじゃけ、いまは分かりません」

領主「さすれば、召すことにしよう。お前も楽になるぞ」

不比の母「妾はここにきて十五年、一步も館をでておりません。」

領主「おまえに不満はないぞ」

不比の母「（遠くを見て）不比をひと目見たい。」 領主「なにもかも望むではない。」

不比の母「千麻なら不比の話がいっぱい聞けましょうか」

領主「どうじゃ、不比も都の衛士として取り立てやろう」

不比の母「それは嬉しいこと。」

領主「大出世のふたりぞよ」

（当時は都から国司として遣わされてきた身の領主は、かつての暮らし、都を忘れられない男でした。また、不比の母のように、祭りで楽しそうに笑う千麻を見初めたのです。女の優しさやにぎやかさがほしくてたまらぬ領主でした。お召しは不比と千麻、それぞれに伝えられました。）

千麻「おまん、こわい顔して、どうしたん？」 不比「都へ衛士として上るようお達しがあったぜよ」

千麻「わはお館様にお召しがあった。」

不比「なにいつ。千麻もお館様に召されるっちゅうか」

千麻「（無言）」

不比「おらのお母あだけですまんのか！」

（青ざめたふたり、抱き合う）

千麻「いやや、どこへもいかさんといて」

不比「でも逆ろうたら牢屋にいれられ、いずれ殺られるぜよ。」

千麻「では、どうしよる」

(離れて、お互いを見る)

不比「まだ見えん」

千麻「(泣き出す)」

不比「(海に向かって叫ぶ) 千麻は渡さんぞ！」

(不比は決心しました。ふたりで舟で逃げようと、縄や水、米、布、ありとあらゆる集めて、舟にのせました。十月の海は、まだ温かみがのこっているのです。日が暮れてから、ひっそりと舟を漕ぎ出し、あてもなく入り江を出ました。とりあえずは、見えている島へ行こうとしたのです。)

二重唱（不比、千麻）

うたのふね

ぼくがのる このふねに
きみものる とおくゆく
あすからは ぼくだけを
みてくれる それだけを
きみまもる このきもち
いつまでも どこまでも
ひとはいず ぼくらだけ
かみいます そらたかく
おもいだす きみのめは
まっすぐに ぼくみてた
おぼえてる ぼくのめは
きみだけを うつしてた
しあわせは ふたりふね
うつくしい うたのふね
つきしずか このふねを
そっとだき あのしまへ

独唱（不比）

しまのあさ

ここはどこ むじんとう
きみのため さがしてた
あさになる つゆひかる
すなしろく たきびたく
このしまで ぼくたちは
いきかえる つよくなる

あのときは ちからなく
きみのめを くもらせた
わかいから だめだから
だれもみな よろこばず
いまはもう ほらごらん
こんなにも ちからみつ

くろかみに はなかざり
はなのみつ あまやかに
いきるんだ ぼくたちは

たすけあって いきてゆく

(暗転、不気味な轟音に二人目を覚ます)

不比「千麻、朝ぜよ。起きい。」

千麻「見いや、あの空はなに。気味悪いわ」

不比「空の左がまっ黒ちゃ、雨が降るろう。右の方は青い空やき」

千麻「青い方へ漕いでいこう」

不比「えい！」

千麻「だんだん大きい波が来ちよる」

不比「しっかりつかまっとき」

千麻「流されんように、みなきつうしばっとく」 不比「この櫂と、おまさんと、おらの足にくくってくれ。」

千麻「そやな、そやな」

不比「なんか食べるものあるか」

千麻「にぎりめし、つくってきたに」

不比「いまのまに、食べておこ」

千麻「ほれ」 (にぎりめしをほおぼる)

(轟音、暗転)

第二幕

新生の海

第二幕 第一場 慈悲のあみ

（あとで聞くところでは、あの日、不比の地元は大地震で、津波が襲いました。村は跡形もなく流されてしまったのです。不比と千麻の小舟は、木の葉のように漂流すること 数日。ある浜に打ち上がりました。不空絹索観音様の御網にかかり救われたのです。 仏様も涙を流すほど清らかな二人の愛だったからです。 打ち上げられた浜に老人たちが集まって来ました。焚き火をおこし、着替えさせ、乾 布 摩擦をしました。貴重な食べ物を持ちより、湯を沸かしました。流木や藁で小屋を作り、交代で二人の様子を看ています。）

村の人「おお、気がついたか。おい、聞こえるか。二人ともよく死なずにすんだっちゃ。よかったよかった。さっそく皆に知らせて来るぜよ」 村の長「さて、これからどうしたものじゃろう」 村の人「おらたちの村は、戦さに取られ残ったのは年寄りばかりよ。」

村の長「ほんなら、せがれが嫁を連れて戻ったことにしちよく。」

不比「おおきに、おおきに。」

村の長「ほなおまさんたちの名前は変えてもらわにゃならんぞ。」

不比「もう帰るところはありませんやき。父母と思い孝行します。」

千麻「夫婦にさせていただき夢の中のようにです。しっかりはたらきます」

村の長「そんなに気張らなくてよい。それより体を作れ」

不比「なら、名はなにと」

村の長「せがれの名前は当磨やったき、きょうから当磨と呼ぶぞ」

不比「おおきに」

千麻「わたしはなんという名を」

村の長「当磨の嫁なら、当磨が決めたらええ」

不比「では、志麻と呼ばせてもらうちや」

村の長「当磨と志麻か、これから村のためにつとめをせいよ」

独唱（村の長）

せがれよ 戦さとして

召されたせがれ

音沙汰もない

当磨よ やっと

帰ってきたのか

こんなふう に 流れ着いた

この男は おまえの魂だ

連れの女は おまえの妻だ

そう思おうぞ

せがれよ 帰ってきたのか

こんなふう に

当磨「今、われら新しく生まれたのだ。おまんを今日から志麻と呼ぶぞ。」

志麻「良い名なこと。」

当磨「志麻よ」

志麻「当磨様」

二重唱（当磨、志麻）

新しいいのち

いま 噂を聞いた

あの日 津波が

村を襲ったと

そうか 黒い空は

そうだったのか

生き延びたのだ

いま思われるのは

ふるさとの海

豊かな海

助かった我ら

それを知るのも

我らならば

新しいのちで

生き直そうぞ

海は悪くない

海を恨むまい

ただ生きていく

我ら 力をつけて

いつの日か

皆でふるさとに

帰ろうぞ

第二幕

第二場 出征の朝

（村人が騒いでいた。お沙汰があり、一名を戦さに出せという。年寄りばかりで、若くて働けるのは当磨しかいない。村人は気の毒に思う。が、当磨は恩返しとばかり、受諾する。志麻は、気が気ではない。当磨の気持ちは勇むばかり、なぜなら新しいいのちが宿っていると分かったから。生きて帰ると約束し、旅立っていく。）

（3年の兵役で当磨は活躍をし、戻ってきた）

当磨「どうだ志麻、かわりはないか」

志麻「坊やも三つ、この子は丈夫で助かりよる」 当磨「そうか、そうか。じつはな村の長におらが着くことになった」

志麻「じゃけど、もういくらも人がおらんきに」 当磨「断るわけにはいかん」

志麻「そうじゃねえ。田畑に精を出さんとねえ」

(その年の暮れ)

志麻「おまんさま、またややができました」

当磨「そうながか、そらええことじゃ。めでたいな。村に一人増えるっちゃ」

志麻「（嬉しそうにうなづく）

当磨「ようけ働かな、食べさせられん。舟也大振りなのを新造するぞ」

志麻「それは、誰も思わんことぜよ」

当磨「待っとれよ。父子で沖まで漁に行っちゃる」

志麻「男の子ならええのやけど（と腹をさする）」 当磨「どっちでもええきに、早よ休め」

（平穩に時は過ぎたが、村人たちはすっかり人氣がなくなった。当磨は、村を治めるま でになっていた。男児も十三歳と十歳のすくすくと成長し、千麻の黒髪に白いものが混じってきた。そんなある日――千麻に異変が起きた。）

当磨「おまん、はよう灯火（ひ）点けんか。もう暗いぞ。」

志麻「（無言）」

当磨「どうした。なんかおかしいな。」

志麻「おまんさま」

当磨「あらたまって、どうした」

志麻「ああ、（号泣） ああ」

（肩を抱いて、やさしく尋ねる）

当磨「なにか悲しいことでもあったんか」

志麻「（泣きつづける）」

（暗闇のなかで、歌いだす。）

独唱 志麻

ああ目が見えませぬ

あなたさま

わたしはもう終わりです

昨日から目が見えませぬ

あなたさまの お話を聞くことは

できましようが

あなたの 目が見たいのです

子どもを見たいのです

生きてふるさとに 戻りたいのです

あの子らに見せたい あなたさま

おゆるしてください

もう目が見えませぬ

当磨「あやまらんでええ」

志麻「糸巻きならできるきに」

当磨「なんも心配せんでええ」

志麻「（無言）」

当磨「せがれたちにも知らせよう」

志麻「明日にしとおせ。」

当磨「そうはいかん」

志麻「まだ知らせとうないきに」

当磨「わしもせがれもおまんの目になるきに、なんも心配しなや。」

志麻「（黙ってうなずく）」

（せがれたち、起こされる）

兄「なにがあつたがや、こがな夜中に」

弟「・・・（目をこすり、突っ立っている）」

当磨「まあ、座れ」

兄「お母あ、どうしたのやか、下向いて」

当磨「志麻は、目が見えんとよ」

弟「うそや！ 何でや！」

当磨「そんなこと分かん。けどきのうから見えん言いゆ」

兄「おらに任しとき、ええ薬探してみるきに」

弟「なんでも手伝うきに」

志麻「（覚悟を決めた風に）よろしゅうに」

（舟も新造し、息子たちも壮健となり、一家は栄えてきました。しかし、もう村人がぜんぶいなくなっていました。そこで当磨は、38年ぶりに故郷へ家族で戻ることを決めました。いよいよ船出です。色とりどりの布で舟を飾り、よろこびを表わしました。）

（舟の上で）

当磨「みな、いまのうちに寝ておけ」

志麻「むかしはふたりやったなあ」

当磨「いまは舟が重いぜよ」

志麻「いまでも覚えています。あの夜は月がきれいでした。」

当磨「そやったのう」

兄「そんなはなし知らんぜよ」

当磨「知らんでええ」

弟「腹へった、腹へった」 当磨「ちっとくらい我慢せえ」

志麻「なんかあったきに（ごそごそ袋をさがす） 兄「（弟に）辛抱しとれ」

当磨「おいせがれ 大きゅうなったのう」

弟「お父う、皺が増えたなあ」

当磨「そんなことないきに」

兄「お母あなんか、まだつやつやぜよ」

志麻「そんなことないっちゃ（微笑む）」

弟「ほんに、どこのだれにも負けん」

（一晩明けて、昼ごろ）

当磨「ほれ、見えてきたぞ」

せがれたち「おお、あれがお父うとお母あの里か」

当磨「よう見とけ、これがおらたちのほんまの里ぞ」

志麻「（見えぬ目で見ようと乗り出す）ああ、里のにおいじゃ、これじゃ」

当磨「ついに着いたぜよ、里の浜に」

志麻「よぞ生きて戻れました」

当磨「ようぞ連れて帰れたものよ

(浜辺に降りたち、みなで海を眺める。そして感慨をもって黙る)」

独唱（当磨）

帰還の歌

山が見えてきた

なだらかな

母者の肩のような山が

浜が見えてきた

虹色の 貝を拾った

我らの浜が

忘るな ふるさとの

この海の匂い この波の音

人は 勇気出せば

何度でも 生き直せる

負けるな おまえたち

この海に 新しく生きよ

（おわり）

